

小倉ゼミナール 6月第3ゼミ報告

I 事務報告

1. 日時

2012年6月23日(土) 13:00~18:00

2. 場所

東京文京学習センター3階 講義室13

3. 出席者

小倉先生、TA和田、森、M2 牛山、倉持、M1 梅津、学部生 君塚、合計7人

4. 配布資料

- ① 君塚さんの論文テーマに関するレジメ
- ② 君塚さんのレジメに先生が書き込みを入れた資料
- ③ 「論文におけるテーマを考える」
- ④ 「社会人の効果的な学び方」
「ゼミ生個人の成長をゼミの質的向上につなげる」
「ゼミ討議において司会者がやること」
- ⑤ 小倉ゼミナール 2012年5月第3ゼミ報告(中間報告)
- ⑥ 小倉ゼミナール 2012年6月第1ゼミ報告(中間報告)
- ⑦ 放送大学 on air 研究室だより「小倉行雄研究室 見通しと構想の力をつける」
- ⑧ 日本経済新聞 2012年6月17日 「米沢富美子 私の履歴書」
- ⑨ 朝日新聞 2012年6月22日「がん相談センター 閑古鳥」
- ⑩ 朝日新聞 2012年6月22日「米 原発監視、現場が勝負」
- ⑪ The Asahi Shinbun GLOBE 2012年6月17日 小暮真久「突破する力」
- ⑫ The Asahi Shinbun GLOBE 2012年6月17日 「どうなる、工学部「デザインする力」を取り戻せるのか」

5. ゼミスケジュール

13:00~13:30 配布資料の説明

13:30~15:00 君塚レジメの検討

- ・グループ討議のやり方
- ・グループ討議形式で「問い」を見出す。テーマ代替案の提示

- ・グループ討議により、テーマの代替案を提示する
このやり方のすごさをよく感得すべき

15:00~15:15	休憩	
15:15~16:00	ゼミにおけるグループ討議の意味に関する説明	
16:00~16:15	休憩、ストレッチ	
16:15~17:00	社会人の効果的な学び方	グループ討議
	読みとりのグループワーク	
17:00~17:10	休憩	
17:10~17:45	社会人の効果的な学び方	小倉先生の講義
17:45~18:00	今日のまとめと一言発言	

II ゼミ内容

はじめに

6月第3ゼミは、大きく3つの内容があった。第1は、君塚紀子さんの卒業研究にかかるレジメの検討である。このレジメの何が問題であり、どのように手直しすべきか、基本的なところから検討した。

第2は、グループ討議のやり方についての解説と実習である。これは君塚さんのレジメ検討をグループ討議により行ったことをきっかけにして、ゼミ生にグループ討議のやり方を教え、その理解の浸透を図ろうとしたものである。

第3は、社会人の効果的な学び方に関する講義である。これは4月からのゼミでも折にふれ行われている。なぜなら、放送大学大学院のような通信教育のゼミでは、学ぶ側の制約条件が一般大学院以上に大きい。したがって、そこで成果を出すとなると、効果的な学び方を意識し、学び方について自分なりの工夫をすることがより多くもとめられるからである。

1. 君塚さんのレジメの検討

君塚さんのレジメの検討状況は、以下のとおりである。

(1) 討議の始まりと戸惑いの状況

君塚さんの卒業論文のテーマに関するレジメの検討は、グループ討議により行った。これに関する討議資料は、君塚さんのレジメ1枚と、先生がレジメに手書きでコメントを書き込んだ1枚の資料の計2枚であった。このうち先生の書き込みがある資料は、討議の着眼点を示すものである。短い時間内でレジメの修正提案にまで行きつくように、この書き

込みメモが添付された。ゼミ生に対する先生の指示は、君塚さんのレジメにどのようなコメントやアドバイスができるか、相談と討議をせよということであった。最初に討議時間として設定されたのは、13時30分から14時までの30分間であった。しかし、グループ討議に時間がかかり、実際は13時30分から15時までの1時間30分を要した。

グループ討議の司会は、先生の指名により梅津さんが行った。ただ討議といってもなかなか意見は出なかった。少し経ってから発言はあったが、思いつきの発言が多く、意見がかみ合うことはない。まして、どのように議論を進め、何が論点になるか明確にされないの、時間ばかり経っても議論が収斂するところには至らなかった。

(2) 小倉先生の問いかけによる展開

そこで、小倉先生から討議を進めるための助け船が入り、ゼミ生に問いかけがなされた。予備知識がない中、また準備がないという状況で、レジメやレポートの内容判断するにはコツがある。それはレジメを俯瞰的、大局的にみることである。そこでは、根本に遡ったところで何が問題になるか考え、非常に簡単なレベルでの問いを発する。これは、「それが成り立つか、成り立たないか」といった二分法で括られる問いにするとよい。

では、君塚さんのレジメを俯瞰的、大局的にみると、どのようなことが出てくるか。そうすると、タイトルには通常ならテーマが反映するのだから、タイトルの適切さから検討してみるのがよからう。このレジメでは、タイトルは「NPOと業務委託」となっている。先に司会者は、「これは論文のテーマを表わすタイトルになっているか」と問いかけた。ところが、ゼミ生からの明確な反応はなかった。これはテーマが未だ不確かであるにもかかわらず、テーマを表わすタイトルになっているかと聞いたからである。タイトルの適切性を検討するには、タイトルだけでわかることを聞けばよい。たとえば、このタイトルには複数の内容があるかどうか、あるいは問いがあるかどうかを聞く。これなら共に、「イエスかノー」に限定した答えに絞って聞くことができる。この理由は、一巡したらまた一人ずつ聞いていく。まずは感覚的な答えでもよいから、結論だけを短くいわせる。実際、このように整理して行くと、これに対する答えは当事者を除き、全員が「ノー」になった。

次に、先生は、なぜ「ノー」と答えたかの理由をゼミ生に聞いていった。これにも一応の答えは出る。しかし、通り一遍の答えばかりで具体性を持った答えがない。このため、先生は、こうした問題を考える場合にどうしたらいいかの説明を始めた。具体的には、考える方法の手順を踏むと、どういう流れになるかの解説である。

(3) 考える方法をフローチャートで示す

君塚さんのレジメの適切さを判断するためには、どのような思考プロセスが必要となるか。先生はこれの一つずつ辿れるように、フローチャートのかたちで板書された。以下の内容である。今日のゼミの眼目の一つは、ここにある。

君塚さんのレジメの適切さを判断するための思考のフローチャート

第一に発すべき問いは何か

- ・問題を簡単化する。
- ↓
- ・基本的なことに戻る
- ↓
- ・このレジメで「何が基本的なこと、基本的な問題」になるか？
- ↓
- ・論文づくりの初めにやることは何か
- ↓
- ・「問いを立てること」である
- ↓
- ・では、このレジメのタイトルに「問い」はあるか？
- ↓
- ・「問い」がない
- ↓
- ・問いの元になる基本構成要素となるものがあるか？
レジメの現状では、問いの元になる基本構成要素が明示されていない
- ↓
- ・そうであるなら、論点は明示できるか？
あるいは、レジメの再構成の余地はあるか？
- ↓
- ・再構成の余地はある。では、どういう観点から再構成すればよいか？
- ↓
- ・これが、これからやることになる

(4) フローチャートの整理に学ぶ

小倉先生が示されたフローチャートには、学ぶべき重要な点がある。まず、イエス・ノーで答えられるシンプルな二者択一の問いを立て、それに答えさせることである。1つの問いの答えが出ると、次の問いを立てる。問いは、問題の軸に沿って立てる。あるいは、論点に沿って出す。これに対して答えを出す。こうしたことの繰り返しにより、問いと答えは段階的に問題の核心に近づいていく。なお、ここでの問いに対する答えは、具体的なものをもとめる。感想レベルのものではない。

この方法は、もう少し一般化すれば、次のようになる。まず複雑な問題は、それを構成

する基本要素にわけける。このため、問題を簡単化する。基本構成要素から問いを発して、段階的に積み上げてゆく。こうすれば、核心に迫ることができる。また、ホワイトボード上で書き込みをしながら、フローチャートを描いていくことは、思考のプロセスの見える化になる。思考のプロセスを見える化することにより、こうした方法をゼミ生が自分のものにする可能性も拓けてくる。

2. グループ討議のやり方に関する実習と解説

次は、グループ討議のやり方に関する実習と解説である。先のように、君塚さんのレジメの検討は、グループ討議のかたちで行った。これをゼミにおいて活用できるものとするには、グループ討議の意義や討議の方法に関する解説を必要とする。以下は、このための解説的講義である。

(1) 討議の方法を会得することの重要性

日本の学校教育では、討議の仕方について教えられることがなかった。それゆえ、日常的な問題に関し、討議を有効に行うノウハウや技術の普及は十分でない。実際、社会人の場合でも、異なる考え方を持つ者が一堂に会して議論をすることで、新しい認識に到達するという経験はほとんど持ち合わせていない。

だが、有効な討議の方法は、本来、実務の場においてこそ大きな力を発揮する。なぜなら、討議という方法は、複数の者がかかわるかたちで問題解決を行うときに取り入れるべき有力な手段のひとつになるからだ。ただし、この場合も、討議をリードする者が効果的、効率的に進める方法を会得していないと、意味ある討議にはならない。逆にいえば、討議の方法を会得した者がリードして初めて、参加する者の協働の力を引き出すことができ、高い成果も期待できるようになるといえる。ともあれ、社会人学生の場合、実際社会における討議スキルの有用性をよくかみしめておく必要がある。

(2) 討議の方法のポイント

そこで、討議をリードする場合のポイントは、どのようなことであるか。これには、以下のようなことが上げられる。

① 論点を明示する

討議参加者に何を議論してほしいか。議論の焦点となることを明確に示すことである。これは単に議題や検討事項を示すだけでは十分でない。どのような観点から、どういう方法で議論するか明解に示さないといけない。

② 意見や発言は、どういう方式でもとめるかを明示する

これには以下のような判断事項がある。自由発言か、フリートーク方式か。順繰りの発言方式か。交差式の指名発言か。隣席との相談協議を踏まえての発言か。グループ討議後の発言か。あるいは、講義や報告、プレゼンテーションを聞いた後の発言か、などである。

③時々発言の評価や、議論の中間的な交通整理をする

論点から逸れている発言や、論点と無関係な発言は中断させる。事実データの事項の拾い上げをもとめているとき、主観的・個人的な印象に基づいた発言は中断させる。発言の主旨や前提が論点、論題とずれている場合も、発言を中断させる。

逆に、論点をとらえた発言は、直ちに評価する。この主旨の発言は歓迎する旨をいう。論点・論題に沿った事実的事項の指摘や発言は、評価する。この主旨の発言は歓迎する旨をいう。論点・論題の主旨や前提、位置づけをより明確にする発言は、評価する。これについても、発言を歓迎する旨をいう。

討議の途中で、中間的整理が必要と判断する場合は、それまでの討議のまとめを口頭でいう。あるいは、それまでの討議のまとめを板書する。さらに、参加者にこの中間的まとめでよいか確認する。まとめにつながると思われる参加者の発言は、評価する。討議参加者に発言の価値を確認する。

④議論を整理してまとめまで行きつくよう、参加者をリードする

討議をとり仕切る者は、議論の整理とまとめ（論点の集約作業）を行う。議論の整理とまとめの作業は分けて行うか、分けないかの判断をする。また、この作業は、司会者が行うか。それとも討議参加者を含むゼミ生全員で行うかの判断をする。この作業は、口頭のみで行うか、板書を使うスタイルで行うかについても判断をする。

整理とまとめの作業は、基本的に発言の分類、集約、評価作業である。このため、以下のような発言に注目する。それは事実的な指摘についての発言、論点の主旨や前提の明確化に関する発言、論点の深化・解明に役立つ発言、論点との適合性を判断する上で役立つ発言、評価の軸を示す発言、そして論点を深め、解明するときに役立つ発言、などである。

3. 社会人の効果的な学び方

最後に、小倉先生から、社会人の効果的な学び方に関する講義を受けた。講義は先生が作成されたレジメに沿って行われた。また、これの理解を深めるため、ここでもグループ討議があった。講義内容とそこから得た知見を整理すれば、以下のとおりである。

(1) 学びに関する基本的な位置決めを行う

社会人の学びは、仕事を持ちながら学ぶということが背景にある。そこで、働くことと学ぶことをかかわらせるためにも、学ぶことについて大きくとらえていく必要がある。たとえば、目的志向の視点から何のための学びかを根本に遡って明らかにする。さらに、放送大学大学院の場合のように論文を書くことが当面の目標になるならば、それをただ与えられた課題のレベルにはとどめておかない。そうではなく、自分にとって論文づくりはどういう意味を持つか振り返る。さらに、これを深めていき、その意義を明らかにすることが大事である。

(2) 基礎力をつける

次に、大方の社会人の場合でいえば、論文づくりに取りくむ前にやるべきことがある。すなわち、論文づくりに必要な最低限の基礎力をつけることである。社会人が論文づくりに取りくむには、以下のことができているかどうか振り返ってみる必要がある。それは専門知識云々の前に、物事の筋道を立てる道具として日本語を使いこなせるかである。社会人が論文づくりに取りくむ前提条件をいくら緩くみても、自分のいっていることを的確に相手に伝えられるレベルでの言葉の力を持たないといけない。そうした意味でいう実用日本語力がなければどうしようもない。そこで、むずかしいことをやる前に、実用日本語力の構築に励む必要がある。

その上で、こうした基礎力がアウトプットにつながっていくようにする。このため、手近なところで実践し、自らを鍛えていく。これが当面やるべきことになる。

(3) 制約条件を踏まえ、そこから前に進む学び方を選びとる

一般に社会人は、学ぶ上での制約条件が大きい。また、ひとくちに社会人大学院生といっても、通信教育の社会人大学院生の場合は、一般の社会人大学院生よりも一層不利な条件が多い。では、こうした制約条件にもかかわらず、それを突破して成果を出すにはどうしたらよいか。

制約条件が大きい放送大学大学院の社会人の場合、表面的にみれば、学びの上で使える武器は何一つないといっていい状態である。そこでは、自らの足元を見直してみることが大事である。社会人の実務や日常の生活において身近なものを見直し、学びの武器にならないか考えてみる。むろん、それは身近なレベルのものであるから一見して何気ない印象であり、直ちに学びの武器になるとは思われないものばかりであろう。しかしそうした外見に惑わされず、そこから自前の武器となるものはないかとみていく。そうすると、身近なところで使えて学びの武器となりうるものは、意外に多くあることに気づく。たとえば、以下のようなものは、見方と活用の仕方次第で学びにおける大事な武器になりうる。社会人の学びでは、こうした足元レベルでもできることを行って初めて成果に近づくことが期待できるといえる。

①ゼミの役割を見直す

ゼミはただ参加するだけでは価値が出てこない。自分の学びやアウトプット創出のため、ゼミを最大限に活用するという視点に立って、それを実際に行ったとき初めてゼミの価値は出てくる。

②ゼミにおける宿題の役割を見直す

小倉ゼミにおける宿題も同様である。これを文字どおりの宿題として与えられる課題のままでもとらえていたら、自分の進歩は期待できない。ゼミにおける宿題は、与えられるものでなく、自分の学びやアウトプット創出のため、最大限に活用する対象ととらえていかねばならない。

③ゼミにおけるプロジェクト活動の見直し

ゼミにおけるプロジェクト活動も、漫然ととらえていてはならない。ましてそれを指導教員が好きでやるものにとらえていたら、これは論外である。小倉ゼミにおけるプロジェクト活動は、組織におけるプロジェクト活動に取りくむことと同様、実務能力を向上させるためのよい機会になるととらえるべきものである。

④ノートの役割を見直し、研究開発機能を発揮させる

ノートも研究を進める上で、重要な武器になりうる。ただし、そうなるにはノートの位置づけを変える必要がある。ノートを単に備忘のメモ帳にとらえていてはだめである。ノートは使い方次第で、研究開発機能を発揮させることができる。ノートに研究開発機能を発揮させることができれば、ノートを基にしたアウトプット創出の可能性が出てくる。

⑤新聞を活用し、論文づくりの基礎資源として役立つ

世の中の動きを知るには、一般に新聞は欠かせない。社会人院生の場合は、もう少し立ち入った意味で、新聞を必要とする。それは、新聞の情報なしで、社会人院生がアウトプットを出すことはむずかしいからである。

とはいえ、新聞もただそのままの状態を受けとめていたら、身近なところにある何気ない情報メディアを超えるものとはならない。これを自前の武器とするには、自分にとって意味ある情報を新聞から探り出すスキルを身につけないといけない。つまり、自分なりの新聞の読み方を確立する。このようなことができ初めて、新聞の情報を自分のアウトプット創出につなげることができるようになる。

⑥仕事は筋道立てた思考や実践をかたちにする場ととらえる

社会人院生の時間の絶対的不足を補うには、仕事と研究の関係についてのとらえ方をかえるしかない。すなわち、仕事は筋道立てた思考や実践をかたちにする実践の場としてとらえる。これにより、仕事の場において、研究の素材を集める可能性が飛躍的に高まってくる。つまり、こうしたとらえ方は、仕事と論文づくりをつなぐ有力な視点になりうる。